# 衆許摩訶帝經と楞伽經との西藏本に就て

――（後學補箋記の一）――

櫻部文鏡

## 一　衆許摩訶帝經は漢譯佛傳中西藏系唯一のものとはいふべからず

大正の初年、渡邊海旭ドクトルは『歐米の佛敎』二〇三頁以下にロックヒルの名著 The Life of the Buddha. を紹介して、これは『漢譯衆許摩訶帝經の蕃本を本としたのだ』といはれた。實にロックヒルが西藏資料によつて譯出したかの書の主要部分たる佛傳の英文を一讀して衆許摩訶帝經に想到するといふことは、これ尋常の人の容易になしうることでなく、渡邊氏の如き多年梵漢經論の相互證定に獨特の才能を發揮して、歐米の諸學匠を驚嘆せしめたやうな人か、又は特に佛傳研究に專心してゐる人でなければ能はぬことだ。しかし『歐米の佛敎』のこの一行の斷定的記述は嚴密なる意味に於ては正確なものでなかつたのである。

恐らく渡邊氏のこの記述が先駆をなしたものであらうと思ふが、かつて常盤博士及び立花敎授も衆許摩訶帝經を西藏傳系の佛傳と指摘されたさうであり、近く寺崎修一氏も國譯一切經本緣部四及

び佛書解說大辭典第五卷に於て該經を解說せらるゝに當つて之に言及せられた。

吾人も該經と同じ素材の佛傳が西藏語佛典中に存在するといふだけの點に於ては異議ないのだけれども、寺崎氏の如く、該經が「漢譯佛傳中西藏系に屬する唯一のものであることは本經の一特色である」といひ、而も實際直接に本經の蕃本と認むべきものは無いところからして、同氏は又「本經に相當する梵本はなく、西藏經典中にも同名の經典はない。漢譯中にこの異譯と稱せられるものもない」といつて、一見前後矛盾曖昧にしておかれることは正しくないことを注意しておきたい。

それで先づ事實はかうなのである――ロックヒルの譯編した佛傳は、その書中到る處に注記せる如く、主として西藏々經甘殊爾中、律部典籍から抽出したものである。さうしてその一半は同書九頁等に明記せる如く、西藏律第三函から取材してゐる。その部分は實に大谷甘殊爾勘同目錄四〇五―四〇六頁に對照記載しておいた如く、漢譯では義淨譯の根本說一切有部毘奈耶破僧事（大正二四九九―二〇六）に相當する部分で西藏譯では'Dul-ba gSlu（律事）の中第十七の gGe-'dun-gyi dBen-gyi gSlu（破僧事）なのである。さうしてこの部分の前半卽ち義淨譯でいへば九九頁から一四七頁迄は、又極めてよく法賢譯の衆許摩訶帝經十三卷に一致するものなのである。

されば我々は改めて「ロックヒルの佛傳は蕃本律藏中より抄譯編成せるものであり、その蕃本律藏は義淨譯の有部律に相當するもの故、ロックヒル抽出の一半は又有部破僧事に出づる佛僧記事と

同じである。而して有部破僧事の佛傳記事は衆許摩訶帝經といふ漢譯の獨立佛傳經とその素材を同じくするものである」といはねばならぬのである。かくて衆許摩訶帝經が漢譯佛傳中で西藏系唯一のものであるとする特色說を棄つべきであり、この外に漢譯中に獨立的異譯はないとしても有部律破僧事の前半がこれと一致することを知らねばならぬ。因に又西藏資料による佛傳は決してこの破僧事（衆許摩訶帝經）に出づる一種のみでないことも認識しておかねばならぬ。それに就ては河口師の西藏傳印度佛敎歷史卷上を一見せられゝば明かである。

## 二　西藏譯楞伽經の二本何れも漢譯の重翻といふは誤なり

先年矢吹博士がそのロートグラフを將來したまへる燉煌出土の圓暉の楞伽經疏（卷第四）所牒の經文は四卷楞伽にして、その漢文の傍には西藏文で經文が對照記入してある。博士は早くこれを珍しいものとして注意せられ、後に鳴沙餘韻の圖版第三にその片鱗を收載提示せられてゐる。之より先、予は本學圖書館の西藏々經勘同目錄編纂中に、甘殊爾第七七六番に漢譯四卷楞伽を法成（西藏名 Chos-grub）が西藏譯せるものあり、その卷末識語に「支那の阿闍梨 Wen-hi の作れる疏に對校して譯出せる」旨を記してあつたので、その Wen-hi とは何人か、その疏本は現存するか否かを漢譯大藏中に搜索して得られず、楞伽疏の古逸本を調べてみても手懸りなく、碩學 Pelliot がかのペックの甘殊爾錄に對する批議補考の中にも（Journale asiatique. Juillet-Août 1914. pp. 128—129）この

Wen-hi に就て種々考察推究されてあるが斷案を認められない。會々蕃本楞伽について鈴木大拙教授の諮問にあづかつた時も、予は未だこれにつき新考を得ず、教授は Studies in the Lankavatarasutra. の中には假りに Wen-hi は文惠？ と記しておかれた。その後予は不圖、鳴沙餘韻の刊行廣告に於て圓暉の疏を知り、ハタと思ひ當る處あり某々先輩を介して矢吹博士にそのロートグラフ恩借を願つたけれども、鳴沙餘韻の解說執事に猶暫く必要だからとて借覽の榮に浴することを得なかつた。とかくする內、甘殊爾勘同目錄第二分冊植字校正中に、幸にも餘韻の圖版部は世に出で、それを一覽して予は直ちに勘同錄二七九頁の No. 776 の脚註㊃の中に、これによる考を、

……今最新刊の矢吹博士『鳴沙餘韻』をみるにその圖版第三に中大雲寺沙門圓暉述の楞伽經疏といふ東土未傳の珍寶がある、それは沙門法成の譯著を幾多存傳した同じ燉煌から Stein 博士が大英博物館へ持ち歸つたものであり、而も疏中所牒の經文の左行には西藏文を幷行せしめてあるではないか、圓暉は誰しも知る俱舍論頌疏の著者で、年壽明白ではないが八世紀前半の人、圓暉は現今支那音 yüan-hui である。今法成が對校に用ゐた疏の著者 Wen-hi とは必ずやこの圓暉であらう。

と記しておいたのである。

その後、大正大學々報第十三輯に河口慧海老師は「矢吹博士撮影將來の入楞伽經研究」と題して、堂々三十六頁に亙る長論文を發表せられ、それはついで矢吹博士の鳴沙餘韻解說卷末にそのまゝ轉

錄收載せられてをる。この論文は老師が圓暉の楞伽疏のロートグラフについて研究されたもので、その要點は

一、圓暉疏に傍記せる蕃本楞伽は板本甘殊爾中にあるものと時々字句の小相異あり。

二、又綴字法の古形を存する點に注意し。

三、その西藏文傍記者を考へて、四卷楞伽の漢文を西藏へ重譯せる法成自身が親しく記せるものならんと推定し。

四、轉じて圓暉疏の牒文及び西藏譯本により四卷楞伽に二三の脫文あることを指摘し。

五、終に西藏丹殊爾にありて漢譯になき二つの楞伽疏に論及された。

ものである。予は今この主論旨に對してゞはなく、その論中に、わが大谷甘殊爾勘同錄を引用云々されし點等につき、後學として且つ該錄編纂の責あるものとして次に述ぶる如き補箋を加へておきたいと思ふ。

（第一）河口師は論文の第四頁に

西藏佛部大藏經中に存する入楞伽經は唯だ二本あつて何れも漢譯より重譯したるものなり。當時西藏には入楞伽經の梵本は傳へられざりしならんか。併し現今ネパール國にはその梵典の幾本も現存せるを見れば、假りに法成時代にはその梵本が西藏になかりしとするも、その後同國

にその梵典の入りしことは疑ふの餘地なからん。然るにその梵典より直接に藏譯せられざりしは、何故かを見るに、かの漢語より譯せし Chos grub 法成の譯本が甚だ優秀なるに依れるなるべし。

といはれた。けれ共これは首肯し難い。全體蕃本楞伽の二本が何れも漢譯の重譯といふことは誤である。成程、蕃本楞伽の二本（大谷甘殊爾錄 No. 775 及び No. 776）中 No. 776 は求那跋陀羅譯四卷楞伽を法成が西藏へ轉譯したことは、その識語により、又現文比較上分明疑ふべからざるもので異論ないが、No. 775 は決して漢譯からの重譯ではないのである。河口師が何れも漢譯よりの重譯といはれた所以は、この No. 775 の卷末に、ナルタン版及びデリゲ版に於ては「法成が支那本から譯した」といふ記事があるからであらうが、この記事の誤であることは吾人が勘同錄二七七頁に記しておいたことであり、鈴木敎授も楞伽經研究中に述べておいて下されたのである。その理由は、

一、この No. 775 の楞伽經西藏文は、本文比較上明らかに現存梵本楞伽に一致するもので、決して漢譯の十卷楞伽や七卷楞伽からの重翻ではないのである。

二、デルゲナルタン兩版の識語は錯誤である、ナルタン版目錄には譯人の記事なく、デリゲ版目錄には印度語から譯出したものだけれ共その譯者は不明であるといふ。そして北京版は本文にも目錄にも譯人に關して何ら記して居らぬ。此經標題には、普通梵本より譯出の諸經論にある

如く西藏語經題の前に梵語經題を載せてをるのである。

河口師が勘同錄を見られながら、この吾人の注記には觸れることなく、只ナデ兩板の本文卷末識語のみによつて漢譯よりの重譯とし、剩へ梵本が西藏に必ず入りたるならんと推想しつゝ猶もそれから譯出しなかつた理由までも論議せらるゝに至つては吾人又何をか言はんやである。このNo. 775が梵本楞伽の藏譯なることは今更いはなくも既に學界周知のことではあるが、この機會に明白にしておきたいと思つたのである。

（第二）次に河口師の論文五頁六頁に「但し大谷勘同目錄にはこの（西藏）二譯について以下の如くに出でをれば西藏譯に對する詳細なる說明として參考の爲めにこゝに揭げん」とてNo. 775及びNo. 776の記事及び註記を引用せられたのであるが、この引用の仕方が不親切なる爲、もし勘同錄を對照披見せずしてこの引用文のみを讀む人には理解し難い點があらうと思ふが、それは別として、次に、

前記目錄の表明法に依ると十卷楞伽と七卷楞伽とは同原本の異譯にして共に現存せる梵文楞伽經の異譯なるが如くに見ゆるなり。然れども……

といはれた。この表明法に對する河口師の理解は誤であつて、吾人の勘同錄表明法はその凡例のD條に示してあるから、それを一見せらるればかゝる的なき矢は放たれなかつた筈である。大體梵藏

漢諸本の對同とか一致とか同本異譯とかいふ言葉はその程度に幾多の段階あることを含むことは聖典批評的研究者乃至經錄披閲者にとつての常識である。吾人が今の場合の登錄表明はNo. 775の蕃本は現存梵本に一致するものであり、漢譯三本中ではその容量及び文章に於て十卷楞伽に最も近く次で七卷本に相當し、四卷本とは最も遠い關係にあることを認めたのである。それでもし西藏楞伽はたゞ一本なればその對同漢譯として十卷七卷四卷の三本をその順序で三つとも記入するのであるが、西藏楞伽は二本ありその內容を殊にするを以て、そのNo. 775には梵本と漢譯では十卷七卷の兩本を勘同せしめ、No. 776にはたゞ四卷本のみを擧げてあるのである。決して河口師のいはれるやうな十卷七卷兩本が梵本に對して同じ程度に於て同本だなどといふことではないのである。